

ハイデルベルク信仰問答講解説教4「神の義と憐れみ」(2011年8月28日 礼拝説教)

【聖書箇所】

モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。主は雲のうちにあって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏して、言った。「主よ、もし御好意を示してくださいますならば、主よ、わたしたちの中にあって進んでください。確かにかたくなな民ですが、わたしたちの罪と過ちを赦し、わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください。」(出エジプト34:4-9)

一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。(ローマ5:19-21)

【説教】

ハイデルベルク信仰問答に基づく講解説教を行っております。今日は、第四主日問9-11までのところを扱います。ここは第一部「人間の悲慘さ」の最後の部分です。以外にもあっさりとして短く信仰問答は、人間の悲慘さ、その罪の問題をここで終わりにいたします。問答の数で言えば九つの問答で終わります。この後は第二部「人間の救い」についての部分に入りますが、ここが分量としては最も長いところです。そこがこの信仰問答の中心になります。しかしその前にこの短い第一部が置かれています。果たしてここは必要なのでしょうか。

人間の悲慘、罪について聞くというのは、人間の負の部分ですから、正直心地よいものではありません。むしろ耳が痛い、聞くに耐えられないということもあるかもしれません。だから短いということではないでしょうか。けれども、実際に、罪について長々と聞くならば、わたしたちはうんざりしてしまいます。もし日曜日の礼拝説教がほとんど、人間の罪の話で終わってしまうなら、説教は間違いない苦痛になってくるでしょう。説教では、もちろん罪が語られ、悔い改めが促される必要がありますが、それがすべてではありません。説教の中心は福音、喜びの知らせですから、そこにはイエス・キリストの救いの出来事が語られる必要があります。しかしその福音が本当に福音として響いてくるためには、どうしても罪が語られる必要があるのです。聖書の示す救いはわたしたちの罪からの救いだからです。その罪がどのようなものか。それを正しく知らなければ神さまの救いの出来事を心から喜ぶことはできません。ただしそれは福音そのものの味を変えてしまうほどのものである必要はありません。福音が際立ってくる程度で充分なものです。その絶妙な加減がこの信仰問答はこのような構造を通して表しているように思います。

そういう言わば、この信仰問答のスパイスのようなところ、第一部の最後のところですが、皆さんはここを読まれてどのような印象を持たれたでしょうか。まずは厳しさを感じられたかたも多いと思います。特に問10では、わたしたちの罪に対して神さまが激しく怒っておられ、その罪を決して曖昧にされず、必ず罰せられるお方であることが明らかにされています。

しかしここでむしろ皆さんに注目していただきたいのは、この問9-11の問かけの部分です。まず問9では、その前のところの一連の問答を受けて、神さまと人を愛することに完全に破れてしまっている人間の罪が明らかにされた上で、それならば、いささか疑問がある。そのように人間は罪のうちには生まれ生きてくるなら、その人間ができないことを要求するのは神さまの方が間違っているのではないか。そういう問かけなのです。これは悪いことをした者が、開き直ってこのよう

な自分にした親が悪いとか社会が悪いと責任転嫁をしているようにも聞こえます。また問10では、人間のそのような不従順と背反を罰せずに見逃されるのですかと問うています。ここに唐突に「見逃す」ということが言われます。まるで神さまが見逃すということをお願いしているかのようです。また問11でも「神は憐れみ深い方でもありませんか」と問う。これも問10の厳しい答えを受けて、何か神さまの憐れみを期待するような問かけとなっているのです。

ここにこの信仰問答の一つの特徴があると申し上げてよいと思います。それはわたしたちの心の中の問いを汲み取るような問かけであるということです。聖書の示す真理に対して、わたしたちの中に生まれてくる様々な思いがある。そのようなものをすべてここでは見越しているのです。つまりそのようなわたしたちのありのままがある。それをこの信仰問答はそのまま受け止めて、そのわたしたちを教え諭すように問答が組み立てられているのです。ですから厳しさを覚えるでしょうけれども、ここには同時に愛をもって教え諭す教育的要素もあるのです。

問9の神さまが人間に対して不正を犯しているのではないかという問かけは、まさに責任転嫁であり言い訳であります。これはアダムの言葉にもすでに表されています。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」(創世記3:12)これはパートナーであるエバに責任を転嫁しているのと同時に、「あなたが」つまり神さまと共にいるようにしてくださった女というように、元を正せば神さまが女を与えられなければこんなことにはならなかったという言い方なのです。わたしたちも自分の失敗を棚に上げて、それを周囲の人のせいにしようとする。そのことで自分の正しさを少しでも主張しようとする心が働きます。

それに対して信仰問答は、はっきりとその言い訳を否定します。これはすでに問6で人間が良いものとして創造されたことを繰り返して、その恵みにわたしたちを気付かせる目的がありますが、ここでの中心はやはり、この罪の責任は人間にあるということをはっきりと示している点にあるでしょう。「身勝手な不従順によって」とあります。「身勝手」というのは、神さまとの約束を一方的に破った人間の失敗を意味しています。神さまはわたしたちのためにすべてを備え、養ってくださいます。しかも自由な意思をもつ者として、主体的にその恵みに応えて生きるようにされた。それは問6で言われていることでも明らかです。

人間は決して神さまのロボットではありません。それが神さまにかたどって造られた人間のすばらしさなのです。けれどもその恵み、自由をはきちがえ、身勝手にわたしたちは用いています。その自由を神さまのためではなく、自分の都合によ

って用いようとしたのです。「それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなる」(創世記3:5) この悪魔の誘いに人間自ら決断して主体的に動いたのです。それは誰のせいでもない。人間の責任においてなされたこと。言い訳はできません。その結果、人間は神さまのすばらしい賜物を失ってしまいました。そこに人間の悲慘が始まります。

そこで問10に入ります。そのような人間の身勝手な不従順を神さまはもちろんお怒りだろう。でも神さまは愛のお方でもあるからこの失敗を見逃してくださるのではないかと。この問いかけには神さまに対する甘えのようなものを感じます。これは問11でも同じように見られます。「神は憐れみ深い方でもありませんか」そういう神さまの憐れみ深いことを引き合いに出してくる。これも甘えです。ある解説書では、この問いそのものが間違っているとあります。でもこの信仰問答を作った人たちは、もちろんそれを分かっているのです。このような人間の過ちに対して神さまの憐れみをもってくださることの凶々しさ、都合の良さをこの信仰問答は見抜いています。でもそれを分かっていたうえで、この問答はその問いに答えるのです。ここにも教育的配慮のようなものを感じます。

考えてみてください。わたしたちは正直、そのような甘え、凶々しさがある。神さまに対して、教会に対してもそうです。神さまが憐れんで見逃してくださることを期待している。教会なら大目に見てくれるだろう、融通をきかせてくれるだろう。そういう甘えは多々あるものです。今日の問答でわたしたちがしっかり自覚したいのは、このようなわたしたちの甘えと、それでも正しさを貫く信仰の厳しさであります。

先ほどは自由をはきちがえている人間の罪を考えましたが、ここでは愛をはきちがえている人間がここにいます。つまり愛とは何でも赦し、受け入れてくれることだと考える。聖書の神さまはそのような愛のお方だから、わたしたちのこの罪を赦してくださいだろう。それが愛だと、肝要さだと勘違いする。確かに聖書は「罪の赦し」を言います。それがわたしたちの救いの中心です。でもその赦しは、罪をなかつたことにすることではありません。罪をうやむやにして、水に流すことではない。人間の罪はそんなに簡単なことではないのです。

問11で「神の至高の尊厳に対して犯される罪」とあります。罪はちょっとした失敗、うっかりミスではないのです。それは「神の至高の尊厳」を汚すものであり、しかも人間は自ら進んでこの罪を犯すのです。あのアダムとエバがいけないことと知りながら、進んで木の実を食べたように。言わばそれは確信犯なのです。人間は自分から進んで神さまの尊厳を傷つけてしまいました。それは神さまの栄光を汚すことです。神さまの名前に泥を塗ることです。そんなに大きなことなのかと思うかもしれませんが、でも神さまが人間をその形に似せて造られたことを考えれば、その道から外れることは、人間自らその神さまの形を壊してしまう。そのようにして神さまの輝きを人間が自ら曇らせてしまったということなのです。それを簡単に赦すことはできない。もしそのようなことを放置しておくなら、黙認されるとすれば、それは神さまの尊厳そのものを疑わなくてはなりません。

それゆえ信仰問答は告白します。「ですから、神の義は、神の至高の尊厳に対して犯される罪が、同じく最高の、すなわち永遠の刑罰をもって、体と魂とにおいて罰せられることを要求するのです」と。この罪に対しては、最高の永遠の刑罰をもって罰せられることを要求する。これはうやむやにはできない。そこに神さまの正しさ、義があるのです。これを水に流すならば、神さまの義そのものが失われるでしょう。それは初めから神さまがお望みではないでしょう。またそのような形で神さまは愛をお示しになるお方ではないのです。ではどのような形で愛を示されたのか。

それはイエス・キリストをお与えになることです。しかもこのキリストが永遠の刑罰をその身に負ってくださることによって、神さまはその愛を示してくださいました。「わたしたちが神

を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(Iヨハネ4:10)

神さまの至高の尊厳に対して犯される罪、その赦されざる罪を御自身の命をもって神さまはあがなわれる。あの十字架のキリストのお姿を思い起こさなくてはなりません。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれた。わたしたちが受けるべき神さまの激しい怒りをその身に引き受けてくださる。そのようにして神さまの義は貫かれ、わたしたちの罪は赦されました。そこに神さまの義の貫き方、愛し方があるのです。今日のローマ書には「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです」(ローマ5:19)とあります。

神さまはその義とわたしたちへの愛をそのようにして表してくださいました。わたしたちはこの神さまの御業にどのように応えていけばよいのでしょうか。それはその義と憐れみに対して甘えるのではなく、その恵みに応えて、ますます神さまの栄光のために生きることに他なりません。もう二度と神さまに泥を塗らないようにお仕えしていくことの決意をわたしたちはこの礼拝で新たにしているのです。わたしたちはこの恵みに対して甘えるのではない。自分の身勝手な行いに任せるのではない。

「神は無秩序の神ではなく、平和の神」(Iコリント14:33)なのです。恵みが表されるように仕えてまいりましょう。お祈りをいたします。